


 海外で活動する  
医療従事者たち

# 地域で保健医療にかかわる 看護師との連携

ホンジュラスと中国とベトナムから

土井正彦 Doi Masahiko

国立研究開発法人国立国際医療研究センター 国際医療協力局人材開発部研修課 / 看護師

## はじめに

筆者は、保健所で働く保健婦が保健・医療・福祉を通して地域住民の生活を支えている姿に関心をもったことをきっかけに、看護師資格を取得しました。しかし、当時(1991年)は男性の保健士(1995年より創設)への門戸は開かれておらず、病院で看護師として勤務することとなりました。その後、2002年から国立国際医療センター〔現在の国立国際医療研究センター(NCGM)〕国際医療協力局に勤務し、海外のいくつかの国の地域で、保健医療・公衆衛生活動等にかかわるようになりました。

## 地域で母子保健を支える医療従事者と活動する： ホンジュラス

第2段階〔1990年代後半～2000年代前半。世界各国でミレニアム開発目標(millennium development goals; MDGs)に基づいて感染症対策や母子保健対策にかかわる活動が増加していた時期)に中南米でもいくつかのプロジェクトが立ち上がっており、そのうちホンジュラスは中

南米において2000年母子保健指標が低い国の一つでした(人口10万人あたり妊産婦死亡率:220,人口1,000人あたり乳児死亡率:33)<sup>1)</sup>。とくにホンジュラスの第7保健地域では保健医療全般への強化が必要であったこともあり、母子保健を通して保健医療の支援が要請されました。そのため国際協力機構(JICA)を通じて、第7保健地域にリプロダクティブヘルス向上プロジェクトが2000年から5年間実施されました。筆者はこのプロジェクトに2002年から約3年間長期赴任し活動することになりました。

このプロジェクトでは、リプロダクティブヘルスにかかわるサービス全般を対象として、システムづくりと研修を通して、産科・新生児ケア,母性看護,医薬品管理,臨床検査,普及・啓発活動,カウンセリング,保健情報,保健行政マネジメントへの支援を行ってきました。例えば,県保健局と県病院で企画担当グループをつくり,病院や診療所で働く看護師・准看護師への母性ケア等のトレーニングや家族指導するための教材づくり,妊産婦や思春期世代等へのカウンセリング担当者のネットワークや地域のメディアを利用した普及・啓発活動を行っていました。とくに,



写真1 ホンジュラスでの研修場面①

研修参加者にフリップチャートを使い母性ケアの説明をしている



写真2 ホンジュラスでの研修場面②

研修中に歌を披露している



写真3 ホンジュラスでの研修後

診療所での患者指導



写真4 ホンジュラスでの視察

コミュニティへの調査にて(左後方が筆者)

暴力や10代の妊娠の多い地域だったこともあり、行政や地域ボランティアとの連携も行ってきました。

公用語がスペイン語のホンジュラスでは、女性看護師は Enfermera (エンフェルメーラ)、男性看護師は Enfermero (エンフェルメーロ)と呼ばれていて、その業務は病院では患者の診療の補助などをしてしていますが、村の診療所で働く看護師は管轄地域の地域住民に対して簡単な診療、予防接種、母子健診を中心に、公衆衛生活動などの業務もこなしています。しかし十分な教育の機会がなかったうえ、その後の継続的な教育もなく、相談し合える同僚もないまま看護師になっていたこともあり、プロジェクトで開催する研修などは参加者同士が学び合えるような関係をつくる機会としていました(写真1)。その研修では、アイスブレイクや歌などを交えながら、同地域の同じ状況にある同僚看護師との互いの経験を共有する機会でもありました(写真

2)。そしてそこで学んだことを地元に戻って実践していました(写真3)。

研修後には、研修企画担当者と筆者で研修参加者の診療所を訪問し、研修での学びの活用状況や診療所周辺のコミュニティの状況調査などを視察していました(写真4)。

### 保健医療行政官と小学校教師の連携で 予防接種率向上を目指す：中国

日本と中国は、感染症の分野、とくにワクチンで防げる感染症に関して協力していた時期があります。1990年からのJICAを通じた技術協力では中国のポリオ根絶にも貢献しています。その後、対象疾患をポリオに加え、麻疹、B型肝炎などに絞り、2006年から中国中西部を対象に「中国ワクチン予防可能疾患サーベイランス及びコントロール強化プロジェクト」が5年間実施されました。このプロジェ



写真5 中国でのワークショップ  
(後方立位左から2人目が筆者)



写真6 ベトナムでの症例検討会(左後方が筆者)

クトの背景として、急速に発展していた中国の社会経済の変化のなか、保健医療(とくに予防接種)に関する政策や規則などの仕組みは存在しているものの十分に対応できず、とくに地方において現場レベルでの改善が求められていました。そこで小児への予防接種のうち、小学校入学時に予防接種証(母子健康手帳の予防接種欄のような証明書)の確認を強化することで、予防接種率の向上を目指しました。モデル地域を甘肅省慶城県、寧夏回族自治区隆徳県として、その地域の小学校教師と保健行政担当者の合同でワークショップを開催し、効果的に小学校入学時に予防接種証を検査できることを目標としました。参加型でワークショップを実施し、保健行政担当者からは予防接種の説明をもらい、小学校教師からはグループワークのファシリテーターやロールプレイの導入などについて説明をもらい、相互補完して実施し、学校・地域に合った教材・資料の作成もしました(写真5)。

このワークショップ以降、学校側では予防接種事業への関心が高まり、保健行政側では母子保健や地域保健に対して学校との連携の重要性が高まることになっていきました。

### 地域の医療連携を医療従事者と促進する： ベトナム

経済発展の著しいベトナムでは都市と地域の格差が広がっており、そのなかで北西部山岳地域は貧しい地域となっていました。その地域にあるホアビン省で JICA 保健医療サービス強化プロジェクトが2004年から5年間実施され、研修システムとレファラルシステムの強化を目的としました。もともとベトナムには上位病院が下位病院を協力・支援する連携システムがあり、そのシステムを活用し

たプロジェクトで、対象地域の省病院(日本では県立病院)を中心に、上位の国立病院、下位の郡病院(日本では市立病院)とのいっそうの連携強化をしました。とくに、郡病院から省病院へは、救急搬送される肺炎の小児患者や周産期の患者が多かったうえ、重症になると省病院でも対応できないことも多く、上位の国立病院へ搬送されることもしばしばでした。このような事例が病院同士で症例検討されることはなかったことから、地域の保健行政と病院(1省病院・11郡病院)で症例検討会を行いました。この症例検討会(写真6)からの学びは多く、上位病院の医師・看護師の指導体制の強化や下位病院の医師や看護師の知識・技術などの能力向上のため研修体制の重要性が高まっていきました。研修体制を整えるにあたり、ニーズに基づいた研修の計画・実施・評価を体系的に実施することで患者搬送の把握・分析・改善をすることにもつながっていきました。

### 日本の医療従事者にも プロジェクトの成果を生かす：ベトナム

NCGM は、2005年からベトナムの拠点として北部のハノイ市にある国立バックマイ病院のなかに事務所を構えています。HIV/エイズや結核、院内感染対策などの共同研究や、保健人材の育成などの国際協力活動を行っており、ベトナム保健省の承認を得て協力協定を結び、日本とベトナム双方の保健医療に貢献する活動を続けています。この国立バックマイ病院と前述のホアビン省病院は上位下位の連携システムにあり、ホアビン省では省病院から郡病院、さらに下位医療施設であるコミュンヘルスステーション(CHS)とも連携しています。前述のプロジェクトを通して、ベトナムの上位病院から下位病院・医療施設を協力・支援する連携システムに一貫してかかわってきました。このようなベトナムのシステムを日本の医療従事者が学ぶ

フィールドとして、2010年から NCGM 主催の国際保健医療協力研修を実施しており、将来海外で保健医療にかかわりたい医療従事者を対象に毎年開催しています。この研修では、ホアビン省内の医療従事者と研修に参加する医療従事者とで、ホアビン省の保健医療の課題をテーマと一緒にグループワークを行っています。双方が保健医療の専門家であることから、相互に学び合えるのが特徴になっています。ホアビン省側からはベトナムの保健医療事情やプロジェクトの成果などを日本側研修参加者に、日本側からは日本の医療事情や課題解決に向けた対応などをホアビン省参加者に伝えています。

2018年度開催の研修でも同様に実施しており、CHS を訪問する機会のないホアビン省病院の医療従事者も日本の参加者と一緒に訪問しています。その際には、地域の保健医療活動や近年導入された日本式のベトナム版母子健康手帳の使用状況などを学ぶこともできました(写真7)。

筆者はこれまで海外のいくつかの国・地域で国際保健医療にかかわってきました。それぞれの国・地域の活動で抱えている課題は異なっても、それを解決するために、そこにかかわる看護師や関係者と一緒になってプロジェクトを実施していくことは同じでした。そのプロジェクトでは看護師たちとことばや文化の違いがあり、時には意見の相違はあるものの、同じ課題に対して一緒に考え、解決してい



写真7 ベトナムでの CHS への訪問  
(前列左が筆者)

くことで醸し出されるプロジェクトの醍醐味がそこにあると思っています。そして、海外で、保健医療にかかわればかかわるほど、日本の保健医療から学ぶことがたくさんあることを痛感しています。互いにもっているものを生かすことで相乗効果が生まれ、それぞれの味を引き立たせていると思います。

#### 【文 献】

- 1) 国連人口基金：世界人口白書2001 人類の足跡と未来への道標：人口と環境の変化. 2001.

# 小児看護

2019年 1 月号

## 子どもの与薬